

戦争体験を語り継ぐストーリーの分析

——沖縄戦の語り——

桜井 厚

はじめに

本論文は、語り継ぐ実践活動において、どのような語り（ナラティブ）が生み出されているのか、どのように聞かれているのかを、語りの内的な構造や語りの構成される文脈からアプローチするものである。とりわけ体験者の話が、非体験者によってどのように聞かれ、語られる場合にはどのように再構成や修正がおこなわれるのだろうか。体験者あるいは非体験者の語りは、社会、文化、政治的に支配的な言説とはどのように関連しているのだろうか。こうした課題を念頭に置いて、本論文では第二次世界大戦において住民を巻き込む地上戦がおこなわれた沖縄戦について、人びとがどのように語り継いでいるのかを検討することにした。

2011年の『沖縄タイムス』（6月21日）は、県民のアンケートを1945年生まれ以前の人、つまり戦時体験記憶の有無とは関係なく、いわゆる戦争体験者の世代を対象に意識調査をおこなっている。対象者の平均年齢79歳、最年少66歳、最高齢94歳の計114人である。体験者からみたとき、戦後世代にはたして戦争体験は十分に語りつがれているのだろうか、という問題意識である。一つの目安となる指標である。①戦争体験が次世代へ伝えられているか。回答は、伝えられている／ある程度伝えられている（63.9%）、あまり伝えられていない／全く伝えられていない（34.1%）。②子どもや身内に戦争体験を伝えているか。回答は、伝えている／ある程度伝えている（約7割）。

伝えていない（3割）（「体験がつらくて話せない」「子どもや孫の関心が低い」）。新聞の見出しには、「戦争体験継承3割危機感」「沈黙心の傷深く」と少数意見に注目した活字が踊っている。沖縄戦と戦後の長いアメリカ統治を経験し、米軍基地の4分の3が集中して基地問題と背中あわせに生きている沖縄県民の意識だから、この程度ですんでいるといえるだろう。他県なら推して知るべし、であろう。では、過半数が戦争体験を伝えている、ないし伝わっていると考えている沖縄で、具体的にどのように体験が語られ、かつ伝えられているのだろうか。

1. 語り継ぐこと

1) 語ることと語り継ぐことの差違

まず、語り継ぐとはどのようなことであろうか。語ることと語り継ぐこととはなんらかの違いがあるのだろうか。語りが語り手と聞き手の相互行為を前提にしているとするなら、語ることには聞き手に多少なりとも語り伝えようとする語り手の意思が含まれていると考えることができる。たしかに私たちがライフストーリーを語るとき、むやみやたらに自己や経験を語るのではなく、たくさんの人生経験の中から語り手と聞き手の関係において語るに値すると思われることを取捨選択して語るわけである。この場合、何が語るに値する出来事か、についての共有が前提になっている。歴史的出来事など、コミュニティや社会における語られる出来事について集合的記憶が存在する。語り

継ぐことは、コミュニティのストーリーや制度的ストーリーとの関連が想定されるのである。

また、語り継ぐとは、体験をした人が体験をしていない人に対して語り伝える行為が典型的であり、語り継がれる立場の聞き手は、その出来事が起きたときは別の時空間にいた人や後世の人である。もちろん、のちに見るように非体験者自身が過去に起きた出来事について体験者から聞いた経験をもとに語ったり、事前学習で得た知識をもとに語る場合もある。このとき、非体験者は自ら体験していない出来事についてはたして語ることができるのか、語ることができるかすれば、語りにはどのような特徴があるだろうか。

2) 出来事は語られるか

人は自分の身の回りに起こった出来事について、どのようなことも語ることができるだろうか。いうまでもなく、語れないこと、語りたいことがある。語りがたさと語られることを分かつ基本的ポイントに、以下の四つがあげられる（桜井 2012、第7、8章参照）

①トラウマ：語り手は苦悩のために語ることができない。戦争、開発、テロなど、多くは社会的暴力に起因する。こうしたトラウマ体験は、過去の出来事を過去化して物語化することができない。なぜなら、過去の出来事は、語り手にとってはいまだ「過去」ではなく「現在」なのであって、語るとは過去の経験を現在へ引きずり出してしまうことであり、体験の直接性とアクチュアリティは、物語に必要な時間やプロットを欠いているからである。ホロコーストのサバイバーの語りについて、L.ランガーは、恥辱、恐怖、怒り、自責感、精神的傷を引きずり出してしまおうと指摘している（桜井 2012：113）。

②自己の一貫性の欠如：過去の自己と現在の自己との間に一貫性がない、大きなギャップがある場合を想定してみよう。戦前、熱烈な軍国少年であったり愛国の兵士だった人が、戦後は民主的な人権活動家であったり弁護士であったりした人は、

自らの過去をおおっぴらには語りがたいものだ。現在の自己と過去の自己の物語が一貫性をもって語れないからだ。こうしたギャップは、転機、転向、改宗の概念によって説明される。こうした概念を使うことで、過去の間違った自己から現在の正しい自己へと変わったというストーリーが構成されて語ることができるようになる。

③語り手と聞き手の関係：語り手には語りたいことがある。一方、聞き手には聞きたいことがあり、特定のストーリーを聞こうとする「構え」をもっている。互いに語ろう／聞こうとするストーリーにギャップがあると、語り手が語っているのに聞き手には聞こえない。聞き手は自分の枠組みで聞こうとするために、結局、聞いていないのである。ランガーによれば、ホロコーストのサバイバー・ストーリーと聞き手が前提にしている解放のストーリーとは大きく食い違うために語りがたい、と指摘されている。また、親密な関係であれば、互いの思いやりが語ることを控えさせることが少なくない。ホロコーストのサバイバーでは、子どもたちへ親のホロコースト体験の語りが語られないことが報告されている。

④コミュニティのストーリーやマスター・ナラティブによる抑圧：従軍慰安婦は、なぜ50年間沈黙せざるを得なかったのか。これには80年代におけるフェミニズム運動の影響があった。それまでの日本軍の慰安婦という「民族の恥」という汚名のために、故国へもどることができなかったり、故国へ帰っても沈黙を守るほかなかった元慰安婦の女性たちがいた。それがフェミニズムの見方によって、男性の女性への暴力という考え、すなわち「性暴力」という考え方が主流になってくることによって、元慰安婦の女性たちは自分が性暴力の被害者でありと自覚でき声をあげることができたのである。長い間の沈黙を破ったのは、「民族の恥」から「性暴力」へと韓国マスター・ナラティブが転換した結果だったのである（上野 1998）。

以上の4点は、語りの分析・解釈するための基

本的な視点である。①②語り手の立ち位置と経験内容、③語り手と聞き手との関係と聞き手の枠組みと立ち位置、④コミュニティや社会のストーリーの存在、を考慮する必要がある。

2. 平和ガイドという語り継ぐ実践

1) 沖縄戦と南風原町の戦跡

では、語り継ぐ活動に焦点をあて、その具体的な活動状況と語られ方や内容の質を検討することにした。最初に南風原町が平和ガイドの活動に熱心に取り組んできた背景を、町の概要とともにふれておく。

南風原町は内陸部に位置し、沖縄県では唯一海がない行政区である。那覇、首里の南に位置し、戦前から交通の要衝であった。戦前には軽便鉄道の那覇・与那原線（T3）や那覇・糸満線（T12）が通っていた。この地理的位置によって沖縄戦では南部への避難路となり、町内で多くの犠牲者がでた。人口は、戦前から60年代まで9,000人、現在35,000人である。戦前は12部落からなり、うち10部落（与那覇、宮城、宮平、兼城、本部、喜屋武、照屋、津嘉山、山川、神里は、農業村落であった。残りの2部落のうち、新川は王国時代に首里につながる土族中心の村であり、大名も首里とのつながりが強く、戦前は宮城と与那覇の一部であったが戦後に行政区に編入された。現在19自治会であり、戦後の慶原（ケバル）は、宮平の小字であった。主な産業としては、サトウキビ栽培、製糖、琉球かすりなどがあり、1977年に「かすりの里」の指定を受けた。戦争を語り継ごうとする意思は、沖縄戦で多くの犠牲者を出したことや陸軍病院壕の存在などから強く、沖縄県の市町村で初めて1982年に「非核宣言」をした町であることに見ることができる。

日本軍第32軍は、津嘉山に司令部機能の一部をおいていた。「十・十空襲」後、病院部隊、防疫給水部隊、野戦貨物廠・兵器廠の各部隊、戦車・重砲兵・高射砲・機関銃などの戦闘部隊が配

備され、照屋や山川には慰安所も設置されていた。軍隊の配備とともに、村民の生活は軍事色に染まり、供出や徴用が日常化になった。黄金森などには壕が構築され、『南風原文化センター・ハンドブック』には、当時、「南風原は『要塞の村』となりました」と書かれている。南風原町の平和ガイドが案内している陸軍病院壕は、もともと沖縄陸軍病院として1944年6月那覇で編成され、「十・十空襲」の日の夜、南風原国民学校校舎へ移動、米軍の艦砲射撃がはじまった1945年3月下旬には、黄金森（くがにむい）や兼城の丘の各壕に移った。約30本の壕が掘られた。その一方で、沖縄師範学校女子部と沖縄第一高等女学校の女学生は2月15日から看護実施訓練、米軍空襲のはじまった3月23日、女学生222人、教師18人が動員（ひめゆり部隊の誕生）されたのである。

現在、南風原文化センターから黄金森をとって陸軍病院壕へ至る道は、「飯あげ」の道と呼ばれている。ここは、かつて1日2回、病院壕から400m離れた喜屋武にある炊事場から、兵隊の指揮で炊事班の女性が食事や水を運んだ道である。艦砲射撃の合間を縫って、水くみやおにぎりの入った醤油樽を「ひめゆり学徒」2人1組で運んだのである。死体の片付けなどもこの道をとっておこなわれた。米軍の南下にともない、5月20日、南部撤退の命令が出、25日までに撤退を完了した。軽傷者は自力で、重症患者には青酸カリを飲ませる命令が出ていたようで、第1外科では軍医が配布したが、第2外科では衛生兵の判断で捨て、第3外科では軍医の判断で土に埋めたという。結局、6月19日に陸軍病院解散命令が出て、まもなく沖縄戦は終わった。沖縄戦で、軍医・衛生兵54人（80人のうち）、看護婦55人（90人のうち）、炊事婦など20人（45人のうち）、女学生123人（222人のうち）が犠牲となった。

1990年、南風原町は陸軍病院壕を町の「戦跡文化財」に指定した。こうした戦跡を文化財指定した地方自治体は全国初であった。「沖縄戦の生き証人であり、町民のかけがえのない共有財

産」という位置づけで、現存する第1、第2外科壕群が、その対象となった。その後、1996年に「南風原陸軍病院壕の保存・活用」の答申がなされ、以後、病院壕の位置確認、20号壕の考古学的手法の発掘調査（戦跡考古学）、試掘調査などがおこなわれている。2007年6月17日から陸軍病院の20号壕が公開される運びとなった。町内各部落の戦災実態調査を主導した吉浜忍氏は、「今後は壕が体験者に代わって沖縄戦を語る」という。ともあれ、平和ガイドは、陸軍病院壕の公開にともなって養成されたのである。現在、黄金森の中には、いくつかの石碑が建てられている。「南風原陸軍病院壕址」「重症患者二千余名自決の地」「鎮魂の碑」「鎮魂と平和の鐘」「憲法九条の碑」などがある。また、1989年開館した旧南風原文化センター跡地の隣には、2010年に「平和の礎」南風原版の4431人の戦没者の碑が建てられた。なお、2009年11月に南風原文化センターが新築開館している。

2) 語り継ぐ活動

南風原町でこれまでおこなわれた戦争体験を語り継ぐ活動のなかで注目されるのは、各字の戦災実態調査である。当時、高校教員だった吉浜忍氏の指導によって地元の高校生、青年による字ごとの各家の訪問、聞き取り調査がおこなわれた。県史の編纂において、石原昌家ゼミによる聞き取り調査に学んだものであった。12部落の悉皆調査の項目は、以下である。話者の体験記入欄（避難コースの地図、家の軍利用や徴用・供出の有無、残っている写真、手紙、遺品など）+家族構成欄（名前、年齢、性別、軍人・防衛隊・学徒隊・学生・生徒など、戦死なら戦死日と戦死地）、屋号の地図。テープ録音をして文字おこしがなされた。1983年から1996年にかけて、喜屋武からはじめ12部落すべてでおこなわれた。この調査は、沖縄タイムス出版文化賞を受賞した。この調査によって沖縄戦のときの南風原町および町民の実相があきらかになった。古賀徳子さん（当時、南風

原文化センター臨時職員）によると、「たとえば新川、首里に近いところですので、戦死率がですね、50%を超えていることがはじめてわかった」。この調査で初めてわかったことが多い。調査拒否はほとんどなく、高齢者の聞き取りに子どもが心配して聞き取りを止めた例があるだけだった。（トランスクリプト内での*S（筆者）、*I、*Yはそれぞれ聞き手をさす。二つの//ではさまれた部分は、同時発話の箇所である。（…）は沈黙で、「・」は約1秒、……は省略を表す。以下、引用されているトランスクリプトも同様）

古賀：おばあちゃんが話していたんだけど、息子さんが出てきて、『いや、うちのおばあちゃんにこんな話させたら、もう夜も眠れなくなって』//*S：ああ、はいはい//あのう、『あとでずっと不安になるんだから止めてくれって』//*S：えーえー//おばあちゃんじゃなくて、家族の方に止められて、（調査拒否は）他は全然ないですね。堰を切ったように語る方が多くてですね。最初はこんなだったよって言って楽しい感じですよ。そして戦中の話になったときに、やっぱり、わーっと止まらなくて、いっぱい涙を浮かべる方もいますし、あのう、もう、こんなのは思い出したくなかったって言われたこともあったけど、いや、やっぱりむしろ話を聞いてくれてよかった、ありがとうっていうことが多かったですね。

この語りから、戦争体験を語る体験者は、一種のトラウマ状態であったことがわかる。また、家族は互いに相手を思いやり、体験を語らせたり聞いたりすることを控える傾向があったことも容易に想像できる。しかし、ほとんどの住民は、そうした語りがたさを越えて語ってくれたのである。外来者のインタビュアーではなく、町行政のプロジェクトであることや地元の若者が主に自分の住む部落を担当したことが語り手の次世代に伝えて

おきたいという思いを後押ししたからにちがいない。これをとおして住民である調査員自身が戦争の実相を学び、体験そのものを身近にとらえることが可能となった。これが地域のなかで沖縄戦を語り継ぐ実践のエネルギー源となったにちがいない。もちろん、時代とともにこうした体験を持つ高齢者は少なくなるから、体験的な語りの収集はしだいにむずかしくなる。それを踏まえると、当時の調査を主導した吉浜忍は、現在、モノの記録化を推奨し、モノをとおして戦争を語ることがこれからの沖縄戦学習の課題となると指摘している（吉浜：2010：81）。2007年の陸軍病院壕の公開も吉浜氏に示唆されるような南風原町のパースペクティブの一環から出てきたものだ。沖縄における遺骨収集は1972年に厚生省（現、厚生労働省）によって、そして1985年には南風原町陸軍病院壕の遺骨収集もおこなわれた。当時は、ブルドーザーやパワーショベル、スコップなどによる遺骨、遺品の収集で、そのあと埋め戻すだけで、記録、保存の発想がなかった。こうした手法では「沖縄戦を語り継ぐとか、あのう、残していくっていう活動と、この遺骨収集が非常に矛盾する」と、古賀さんは語っている。こうした反省をもとに、南風原文化センターでは、遺骨がどのような状態で発見されたのかの全体像を記録保存する「戦災考古学」の考え方が導入されるようになった。

南風原町は、国や他県にさきがけて戦争遺跡（負の遺産）を「町の財産」、すなわち文化財としてとらえる視座を培ってきた。南風原町が他に先んじて培ってきたこうした視座がどのように養われたのかについては、もうすこし丁寧な考察が必要であろうが、それは別稿に譲るとして、ひとまず南風原町における語り継ぐ活動を見ておこう。

南風原文化センターを中心とする戦争体験を語り継ぐ活動としては、陸軍病院壕の平和ガイドのほかに、恒例の行事となっているものとして次の三つをあげることができる。一つは、文化センター内の「常設展示」である。二つ目は「町民劇場」、三つ目は「子ども平和学習」である。こう

した活動は、町史編集室、文化財課、そして文化センターが一体となって進めている。だからといってかならずしもいつも町が一丸となって推進しているわけではないことに注意したい。もちろん、町財政の問題もある。また、経済的な問題とは別に、たとえば、文化センター新館の開設（2010年）にあたって、戦争展示（現在の「南風原と沖縄戦」の展示）に「議会で、じつは反対、賛成、真っ二つに分かれて、で、最後の議長の1票で、ぎりぎり決まったという。そういう、その、いきなり博物館、博物館の最初に戦争の展示というのは印象が悪いんじゃないのか」と、異論も出されたように町内がかならずしも一枚岩ではなかったからである。

町民自身の手作りで数年ごとに開かれる「町民劇場」では、戦争体験世代と戦後生まれとの交流を主眼として、演劇をとおして沖縄戦を追体験する「平和創造劇」が演じられ、町民自身によって語り継ぎがおこなわれている。

また、「子ども平和学習」は、毎年、小学6年生8人を対象に、沖縄戦、ヒロシマ、人権、差別などを学習し、報告書を作成している。それぞれ町から旅費を補助して文化センター職員が付き添い、たとえば広島など国内外へ出かけ、現地で子どもたちの学習会、交流会をおこなっている。2010年度には、この修了生が主体となって自主的な平和学習会、「はえばる youth」の会が誕生した。

以上のような恒例の平和行事とは別に、陸軍病院壕20号壕の一般公開に向けてガイドの養成がおこなわれている。その見学者を案内する平和ガイド養成講座が、まず2006年度、2007年度に開かれた。第1回は、20名の予定に県内を中心に60名という多数の応募があったため、結局、60名全員を対象に講座を実施して50名が修了証を受けた。第2回（2007年9月）は受講生を町内在住者にしほり、9名が受講し、9名が修了、以下、第3回（2008年7月）は県内から15名の応募で12名が修了、第4回（2008年10月）では

町内から8名が応募し8名が修了した。第1期の修了生が中心になり、2007年4月に「南風原平和ガイドの会」発足し、2009年9月にはNPO法人化されている。

3. 非体験者は何を語るのか

1) 体験者と非体験者

ひめゆり平和祈念資料館では、元ひめゆり学徒の証言のアーカイブ化を進めながら、展示物に体験者自身が説明を加えている。もともとモノに語らせるというコンセプトをもち、あまり展示物に説明文を付け加えず、むしろ体験者自身が説明を加える形式だった。こうした元ひめゆり学徒は、「証言員」と呼ばれている。しかし、体験者の高齢化とともに「証言者」がいなくなったときに分からなくなならないように2004年の資料館のリニューアルにあわせて展示物に説明文が付け加えられたのである。しかし、証言員の役割がなくなったわけではなかった。なぜなら、これまでの証言員の経験から、説明文だけでは十分伝わらないと考えた資料館は、これまでの「証言員」に代わるものとして、若い世代の非体験者が説明する「説明員」を養成することにした。ここでは、体験者と非体験者はそれぞれ「証言員」と「説明員」とに区別される。それは役割の違いを表しているのだろうか。さらにひめゆり平和祈念資料館の事例を見てみよう。

その「説明員」の最初の役割を担わされることになった仲田晃子さんは、直接、証言員の活動を観察したうえで言う。「彼女たちは証言員の仕事をずっとやってきて、来館者の方と直接お話しすること、対面して説明することの重要性みたいなものを、その活動の中から感じ取っていたんです。(中略)彼女たちの活動、〈語り部活動〉とも呼ばれたりしている証言員の活動は、語り部というイメージからはみ出るようなことをいっぱいしていたんです。」

証言員が自ら語るだけではなく聞き手の客の戦

争体験を聞いたり質問を受けて応えたりしている姿を観察し、「一方的にしゃべっているわけではなく、来て下さる方のことをよく見て、何が見えていないのか、どう言ったらうまく伝わるかということ、考えたりする姿が見えてきました」と仲田さんは述べる。彼女は「戦争体験を一人称で私は語ることはもちろんできない」けれども、教えてもらったり、質問されてともに考えたり、思考や言葉を鍛えるといったかたちで「説明員」の役割を果たそうと考えている。仲田さんは、「彼女たちは、自分の戦争体験について話すんですけど、私はたぶん、彼女たちを通して戦争を見るし、彼女たちがどういうふうに関後生きてきたかということについての話をしています。そういうことをしていくことが、たとえば戦争のあった六十何年前と、いまとの時間をうまくつないでいくことになる」と、過去と現在を関連づける(松尾他2011:364-7)。

では、南風原町で、平和ガイド養成講座を企画、担当してきた文化センター・スタッフは非体験者が語り継ぐことについて、どのように考えているのだろうか。

平良：体験者の方々ですね、あのう、あんたたちにはわからないよ// *S：うん//もう、体験した人たちにしかわからないとおっしゃる方もいますけど、その体験した人、が、その人自身が、いや、私たちが知っているのは目の前のことだけであって、その同じ時期に、あのう、沖縄の別のところでは// *S：はいはい// どういうことがあった、上ではどういう動きがあったかっていうことはわからないわけだから、あのう、それを勉強してすることができるあなたたちの方が、もっと広く、あのう、戦争のことわかるからそれをがんばりなさいっていう方もいるわけですね。// *S：あー、はいはい// やっぱ、体験していない人が何も伝えられないんでなくて、何らかの形で表現することで、伝える方

法、いくらでもあるので、いろんな方法があっ
ていいんじゃないか。

文化センターで精力的に平和活動を推進している学芸員平良次子さんは、地元の体験者の語りを根拠に非体験者が語り継ぐことができる可能性を語る。体験者自身は、経験としては自分の体験を通して身近な状況しか見えていない。それに対して非体験者はむしろ戦後から回顧的に全体状況を踏まえて語りを位置づけることができるという点で、体験者は戦後生まれの非体験者の語り継ぐ活動を積極的評価しているのだと理解する。

南風原町平和ガイド養成講座で、ひめゆり学徒「宮良ルリ」さんの講話を聞いた受講生（養成講座3期生）は「最初に印象に残ったことは『一人ひとりが異なる体験を持つ』という宮良先生のことばでした。先生の体験談も薄れていく戦争記のひとつで、南風原の陸軍病院壕にもそういった物語がうずまいているんだと考えると胸が詰まるようでした」と感想を述べている。体験を聞くには個別の体験を聞くようにすることの意義が強調される。体験者のそれぞれの声を受けとめる必要性を感じているのだ。

陸軍病院壕で「どうして戦争体験してないのに、戦争のこと話しているんですか」という学生の質問に、平良さんは「自分の周りには体験者がいて、あのその人たちの今は、その強烈な体験があつて、あの、何か秘めているっていうか、もっているものが、苦しいものも悲しいものも、負い目も、みんなもっている人たちが今すぐ傍らで一緒に生活しているのに、その人たちともっと深くもっといい付き合いをしようとするなら、その人たちのその部分をしらないといけないと思うから。今まったく体験者がゼロでなくて、あの、さあ過去のことを勉強しましょうというのとは違うような気がしたんです。今生きている体験者のみなさんと向き合うためには」とも語っている。彼女は、非体験者が安易に語り継ぐことができるとは思っていない。なによりも、現在、体験者に向き

合って生きることこそが重要だと考えているのである。体験者は、過去のある出来事をそのまま記憶に止めている過去の遺物として今日があるわけではない。その後の長い人生経験を通じて、当時の出来事や体験を解釈し、再解釈しながら現在を生きているのである。その意味で、体験者は戦争「体験」を生きただけではなく、今日までの戦後を含む戦争「経験」を生きている、と言い換えることもできる。

* Y：継承とかいうと、どうしても次世代へ語り継ぐとか、そういうような発想があつて、今生きている人はどうなの、っていうのは、結構なおざりにされてきた。

平良：ずっと、自分もそう、世代から世代へと思ってたんですけど、そうじゃなくて今いる人たちのことを知るためには、今できるんだな、って気がした。去年、ほんとにはっと思つて、ああ、子どもたちにはたくさん年寄りに会わせる方がいい、って気がしたんですけど。

「今いる人たちのことを知る」という平良さんの言葉は、先にあげた仲田さんの「彼女たち（ひめゆり学徒のサバイバー）がどういうふうになつて生きてきたかということ」を語ることに「説明員」の役割のひとつがあるとする認識と共通するものである。

2) オリエンテーションの操作

さて、実際に非体験者が語り継ごうとするとき、過去を現在と関連させるために語り手はどのような語り方の工夫をしているだろうか。物語を構築する際の基本的枠組みに時空間の枠組みがある。ナラティヴの古典的モデルであるラボフの図式によれば、オリエンテーションとよばれる要素である。この要素によって、語りのリアリティは現在の語りの場である「いま・ここ」から「あのとき・あそこ」の物語世界へ移行するのである。語

り継ぐとは、過去の出来事を過去に止めるのではなく、現在と関連させるワークである。では、具体的にオリエンテーションとなる時空間の移行が、どのようになされているのかを見ておこう。重要なことは、戦争体験は過去の出来事ではなく現在の自分と関連しているという「気づき」である。

南風原文化センターの元館長大城和喜さんは、南風原中生徒を黄金森へとガイドする際に、「飯あげの道」を通りながら「(黄金森には)たくさんの骸骨が転がっていて、骸骨山と呼ばれていた。子どものころは、骸骨と遊んだりもした」(『琉球新報』2009年6月6日)と語ることで、いまの場所を過去の戦争の犠牲者と結びつけている。また、南風原平和ガイドの会の黄金森周辺の戦跡巡りで「ここは南風原で一番早く緑豊かになった。たくさんの日本兵の血肉で育ったのだろう。この大きなグワバの実は空腹を紛らわせた」(同、2009年6月25日)とも語る。同じように、平良さんもそうした語りの操作について語っている。

平良：子どもたちに、とか、こっちきた人たちに、あの一、南風原町は、あなたの今歩いている道は、遺骨も不発弾も埋まっていますよって。えーっ！って(笑)、えーっていう感じの人いたんですけど、ほんとですよって(笑)という話をする。

A. シュツツによれば、リアリティの移動には一定のショックがともなう。だから、ショックをともなう「気づき」とは、遠い過去を現在の「いま・ここ」へ引き戻す作業のことである。語り継ぐときには、そうした操作が意識的になされるのである。

3) 平和ガイドとして語ることの意味

非体験者が平和ガイドになること、平和ガイドであることを、どのように自己認識しているのだろうか。語り手が平和ガイドである自己をどのように定義するかは、自己のライフストーリーを語

ることによっておこなわれる。もちろん、その語りはインタビュアーの質問／応答、そして承認や批判を離れては考えられない。語り手の自己呈示は、インタビュアーとのやりとりをともなう構築されていくダイナミックな過程である。では、平和ガイドであることに対して、どのような一貫した自己物語(アイデンティティ)がつくられたのだろうか。以下、三つの語りのバリエーションを紹介する。

①「まずは自分が知りたい」

K fさんは50代の女性である。南風原町に生まれ、結婚後も南風原町在住しており、平和ガイド養成講座の1期生である。琉球舞踊の教師免許をもち、NPO法人「南風原平和ガイドの会」の役員である(2012年当時)。

* S：小、中学校のあたりのときは、当時の平和学習っていうのは(…)

K f：あのときは、なかったですね。ちょうど沈黙の状態の頃、学校サイドでは、そういうお話は聞いた記憶、ないですね。

* S：その当時に耳に張ってくるのは、周り
// K f：そうです//自分の家族の上の世代から、

K f：うーん、もうその、身内のたいへんさしか聞いていません。

* S：たいへんさというのは、生死、生きるか死ぬかみたいなたいへんさなのか

K f：ううーん、そうですね、北部への疎開(…)(平和ガイドに)関わって、はじめて沖縄戦ってたいへんだったんだあっていうようなことを、恥ずかしながら、ハハ、わかったような状況ですね。(家族との会話でも)自分の無知さを感じますし。(子どもに)高校生がいるんですけども、総合学習あたりでかなり勉強しているようで、「え？おかあさんはそんぐらい知らないの」(笑)って言われたりします。(1期生募集の時、ほかか

ら)誘いもなかったんですけれども(募集を見て)になか、またあの一、やりはじめたいなあということを模索中だったものですから、ほんとに、沖縄戦のことがわからないといっ
ていいほど、知識がなかったもんですから、そこらへん、知識として、少しでも、っていう思いがあったもんだから。

では、平和ガイドをとおして、彼女は誰に何を伝えたいのだろうか。しかし、彼女はまず自分の学びの一環であることを強調する。

K f : あー、あのおー私が学びたいというのは、その、現実を、沖縄戦そのもの(・)を知りたいわけなんです、それに対する思いというのは、その、次にして。で、やっているうちにやっぱり命の大切さ(…)伝えていくべきだって強くけどね。

* S : だから、あの戦争はなんだったのっていうふうに言ったときに、K f さんなりに思っているのは、今、どんな結論なのかなあという、

K f : う、(・)うーん、まだ結論は(…)それは(笑)

あえて問うことによって「命のたいせつさ」を伝えていくべき、と応えてくれたものの、第一義的には沖縄戦そのものの知識を身につけたいのである。では、平和ガイドをするにあたって、自分が体験者ではないことの是非については、どのように考えているのだろうか。

K f : 自分自身は(…) (体験者じゃなくても)伝えられるっていうような思いは強いんですけども。たまにはですね、いらしゃる見学者のみなさん、「体験者じゃないよね？」っていうことで、そういう見方をされるときには、困りますね。

体験者じゃないことに見学者が敏感であることには、戸惑いを隠せないが、非体験者であっても「十分、伝えられると思っています」と、K f さんは明快な理由を語らなかったものの力強く返答している。「南風原平和ガイド友の会」の役員という立場から、これは譲れない一線なのかもしれない。

②「自分がすんでいるところを知ることは大切」

O f さんは南原町生まれの高校3年生の女性である。小学6年で「子ども平和学習」に参加、その後「あおぎり」の会(「子ども平和学習」OBの集い)に参加している。高2で「南風原町youthの会」発足から参加し、現在、壕のガイドも担当する。ガイド養成講座の4期生である。ガイド養成講座を受講した動機を以下のように語っている。

O f : 参加したのは、先生に声かけられて、まあ、なんとなくやってみようかなーって思ってやったんですけど、あ、おばあちゃん、今おばあちゃんと一緒に住んで、おばあちゃんが体験者なんですよ、戦争の。それで、ずっと自分が興味あって、よく聞いてたんですね、おばあちゃんから。// * I : うーん//だから、勉強してみようかなと思って参加しました。

* I : もともと興味があった、うーん、じゃ、ほんとにちっちゃい頃から自然になんか、なんかこう聞いてたていう。

O f : なんかそういう話をすごく聞きたくて、おばあちゃんに。おばあちゃんには思い出すから聞かないでーって言われたんですけど、え、教えて教えてーってよく聞いていました。

(「子ども平和学習」「youthの会」のトピック、再びガイドの研修講座受講の話を経て)

O f : (おばあちゃんは) ほんとには、思い出したくないさあーとか言ってるんですけど

……黄金森の一部に住んでいるみたいな感じなので。おうちがすぐ近くなのでなんですよ。自分が住んでいるところを知ることはやっぱり大切だと思う。

* I : ご両親は、親御さんはどう？

O f : 親は応援してくれてます。はい、受験勉強もしないんだけど(笑) // * I : そういう時期ですよ//はい、ですけど、でもやっぱり youth (の会) は応援してくれるし // * S : ああ、そう//今日も、ガイドも、うん、がんばってこいよ、みたいな // * S : へえ//はい。

* S : あの、さっきご両親の話で、……ご両親自身はなんかこう、今まで、南風原の平和学習とか、センターの企画行事に参加したことは？

O f : うーん、お母さんはあんまり興味なかったと思うけど、お父さんは、結構、平和活動とか、

父は平和活動に熱心で「県民大会」や「人間の鎖」などの運動にも参加している。現在、町議を勤めているという。

* S : じゃあ、関心をもったのは、お父さんにね、けっこう影響受けてる？ =

O f : = かもしれないですね(笑)

笑いながら即座に返答が帰ってきた。父を信頼している様子が伝わってくる。

③「平和ガイド以前に、うちなー意識」

Amさんは50代の男性である。サラリーマンを辞めて漆喰シーサー職人に転職した。沖縄県観光ボアンティア友の会、南風原平和ガイドの会、平和ネットワークなど、主だった平和ガイドに所属し、依頼に応じて、各地で平和ガイドをおこなっている。南風原平和ガイド養成講座の1期生である。ガイドの「やりがい」について尋ねた。

Am : 修学旅行生を案内するとき、ガマの暗闇体験ですね。生徒たちの目の色がもうほんとに変わっていく。

多くのガイド経験者がこの「暗闇体験」の効果を語っている。疑似体験によるリアリティ移行がもたらすショック効果であるが、いうまでもなく、これもオリエンテーションの変換の一種である。たしかに参加者に現地の体験による変化が見られるのは、ガイド冥利に尽きるのであろう。しかし、Amさんが自らの役割を自覚したのは、なによりも自分の身近な親戚が当時の日本軍兵士と特別な関係にあったことがわかってからである。

Am : ガイドするようになってからわかった部分っていうか、すごいショックな部分があったんですよ。おふくろが座間味の阿真集落出身で、親戚の家が残っているんですよ。夏休みになると親戚の家に遊びに行ったりなんかしてたんですよ。あとからわかったんですけども、つい、最近、3、4年の間に、それは自分で勉強している間に、村史とかそういうの読んでいると、屋号がでてくる……遊びに行って泊まった家が、じつは慰安所で使われていたんだってことがわかって、……そういうような接点のなかにいるんだっていうのが、ここ3、4年の間にはじめて知って、そこからやっぱり平和ガイドとしてはきちんと伝えていかないといけないなっていう、もうそれはある使命感っていうかなんていうか。

母は、これまでそうした事実を一切語ることがなかった。Amさんがふれても「うちのおふくろなんか、話をそらしてしまうんですよ。息子の私なんかにはそういった話はまるっきし言ってくれないっていうか」。母には、現在の沖縄の語りのなかでもとても語りづらい現実なのだろう。

南風原町の平和ガイドは、いま大きな転換期にある。陸軍病院壕のガイド養成講座の修了生をも

とに結成された「南風原町平和ガイドの会」は、20号壕のガイドだけではなく町内の産業や観光振興とあいまって「総合ガイド」へと形を変えようとしている。町の特産品の販売や開発と関連させて、平和ガイドを基礎に町おこしにもなる総合ガイドへと変貌をとげようとする動きが出てきている。これについて南風原町出身者ではないAmさんは、明確に異論を唱える。地域おこしや町づくりはあくまでもローカルティに根ざしているが、戦争や平和の問題は地域のローカルな境界を越えた価値をもっているから町外からもガイド・ボランティアが集まるのである。実際、ガイド養成講座に集まったのも町外出身者が多かった。だからこれまでも隔年ごとに町内限定でガイド養成講座を開設してきた経緯がある。

Am：地域おこしだったら、私は自分のところをね、沖縄市の部分をやりますよっていう感じ、ハハ。わざわざ南風原まで来て、そうやって地域おこししたりとか// *Y：あー// 私はやるあれはないでしょ。だから、私は平和ガイドだけしかしませんよっていう、この20号を中心とした平和ガイドしかしませんよっていう感じの話はずっと言って。南風原町外の人はもうたいていそういった感じじゃないかなって思いますけど。

最後に、県内各地で平和ガイドをしながら、Amさんがこの実践で大切にしているもの、こだわっているものが何かを尋ねた。

Am：私自身、戦争体験はないんですけど、ないにしろ、親の体験をきちんと私自身が受け継いで、さらに若い皆さんにそれを引き継いでいってもらいたい、そういった思いでこのガイドをするようになりました。……えーっと、えーっと平和ガイド以前に、やっぱり「うちなー意識」の部分が根本なんじゃないかなーという感じと。沖縄に対するこ

わり。ウチナンチュというアイデンティティなんですよ。復帰は1972年ですよ、高校時代、……敵対するのではなくて、ウチナンチュとしてのアイデンティティをきちんともちながら、それで主張していった。

Amさんは自分のアイデンティティを、アメリカ統治下の沖縄、復帰時の沖縄、その後もいこうに改善されない沖縄の状況とともに形成してきた。彼は「うちなんちゅ」のアイデンティティを強調することで、日本のなかの沖縄の現実というナショナルな語りを見据えて語り継ぐ実践に従事しているのである。

4) 平和ガイド実践の語りの様式

平和ガイドの実践が自分にとってどのような意味を持つか、という問いには、きわめて個人的な動機を語る人から地域のコミュニティの集合的な価値や国や制度との関連で語るなど、いくつかの語りの様式が見られる。一般的な語りの様式を私が整理した図は、次頁にある(桜井2012:105)。

では、上記の三人について、語りの様式はどのようなになっているのだろうか。

まず、Kfさんは、なによりも沖縄戦や平和を自己の「知識」の獲得と結びつけている。子どもから教えたりされたことがひとつのきっかけになっていることからみても、パーソナル・ストーリーのレベルで平和ガイドをとらえていると見ることができる。

それに対して、Ofさんは、ある種のトラウマ体験になっている祖母の沈黙に対する強い関心と共感を示しながら、両親からも大きな「影響」を受けてもいる。もっとも、彼女は、両親の影響を「応援」と表現することによって、あくまでも自己の「自律性」を強調しているところは注意したい。そして、彼女はなんといっても南風原町の平和学習の申し子といってもよい。「子ども平和学習」「アオギリの会」そして創設間もない「youthの会」に参加し、同時に「南風原平和ガイド養成講

表 語りの様式

出来事を選択・ 配列のパターン	多様な意味や経験の領域	空間的概念	語りの様式 (桜井)
制度的モード	政治、統治、党、組合、選挙の領域、 国民的・国際的な歴史的な文脈、イデオ ロギー	国民国家と 世界	マスター・ ナラティヴ
集合的モード	コミュニティ、近隣、職場生活、スト ライキ、自然災害、儀礼、[制度的] エピソードへの集合的参加	町、近隣、 職場	慣習的用語 法モデル・ ストーリー
パーソナル モード	家庭生活、子ども 私的、誕生、結婚、職業、死のライフ サイクル、他の二つのレベルへの個人 的関与	家庭 個人	パーソナル ストーリー

座」を経て平和ガイドを務めている。南風原文化センターが強力に進めてきた平和学習の産物でもある。だから、家族の影響力を越えたコミュニティの問題として「地域」を理解する必要性を説くのである。ここにパーソナル・モードとは異なる集合的モードとしてのコミュニティ・ストーリーの一例を見ることができる。

Amさんは、沖縄で主要な平和ガイドのグループに登録し、精力的にガイドを引き受けている。そうした語りには、必然的に集合的／制度的モードの語りを取り入れられている考えることができる。もちろん、彼は自分の身近な経験と関連づけながら、「慰安所」というナショナルな問題とつながる語りを生み出している。そのうえで、強調されるのが「沖縄のエスニック・アイデンティティ」という「沖縄の文脈」である。平和ガイド以前に「ウチナンチュ意識」が基礎にあること、戦争中に「捨て石」「犠牲」となり、いまでも全国の基地の74%を占める沖縄の現状に対する告発が背景にあると明言するのである。平和ガイドにおいても、こうした集合的／制度的モードの語りが基底となっているのである。こうした「沖縄の文脈」は、後にふれるように、本土の「捨て石」「犠牲」とは異なり、古く「ヤマト文化」に対する「琉球文化」の違いにおいても見られることに

は、注意しておきたい。

4. 語り継ぐストーリーの特徴

1) 講話の感想

これまで、語り継ぐ側の語り手を中心に、その意図や語りの文脈を見てきた。次に、受け手の側がどのように受けとめているのか、語り手のストーリーをどのように聞いているのかの一端を明らかにすることにしたい。沖縄には、本土から多くの中高生の修学旅行生が訪れる。そのなかで、沖縄戦の戦跡をめぐるスケジュール取り入れている団体が多い。摩文仁の丘の「平和の礎」や「ひめゆり祈念資料館」「沖縄県平和祈念資料館」、そして糸数壕（アブチラガマ）など各地に散在する「ガマ」見学などがおこなわれるのが常だ。平和ガイドが旅程に付き添ってくれる場合もあり、それぞれの場所でガイドが待っている場合もある。また、こうしたガイドは、多くは非体験者によるボランティアであるが、それとは別に宿泊先のホテルで体験者による講話がおこなわれることもある。体験者は、当時、小学校高学年の生徒であった人でもすでに80歳前後になっている。ここでとりあげるYzさんもそうした講話をおこなっている体験者の一人である。Yzさんは「沖縄県観

光ボランティア友の会」の一員であり、その養成講座を経てこれまで平和ガイドを務めてきた。現在、この会に所属していて沖縄戦の記憶がある体験者は、2010年現在、4名と聞く。

Y zさんの講話は、通常、質疑を入れて70-90分程度である。以下に、2006年7月におこなわれた岡山県の某中学校の修学旅行で行われたY zさんの講話を、中学3年生176名がどのように受け取ったかを考察する。ここで分析のデータにするのは、後日、中学生がY zさんに送ってくれた感想文である。この感想文を分析の事例に選んだ理由としては、内容が把握しやすいためである。こうした感想文や礼状は多くの学校から届けられるが、たいいていははがきサイズの用紙に百字か二百字程度の短い文章から成り立っている。ところが、この中学校の感想文はB5の用紙に平均三、四百字程度の感想が書かれていて分量も多く、主張や感想内容が比較的具体的に理解でき、語られた講話の内容もある程度判別できるのである。

感想文は、手紙の形式をとっている。どのような形式をとっているかをイメージするために、比較的まとまりがよい感想文の全文を一例としてあげておこう。

〔感想文1〕(全文)

夏の日差しがまぶしい本格的な夏となりました。Y zさん、その後、いかがお過ごしでしょうか。先日は沖縄戦について詳しくそして分かりやすく話してくださり、本当にありがとうございました。Y zさんのお話は戦争を経験したことがない私達にとって、かなりの衝撃でした。

私達が沖縄へ行く前、学校で平和学習をしていました。受け止めがたい現実、皆、怖さや息苦しさを感ぜられずにはいられませんでした。しかし勉強していくにつれ「これが現実なんだ。」「このことをしっかり受け止め、私達の子や孫につたえていかなければならないんだ。」と思いはじめるようになっていき

ました。

そして沖縄へ行き、1日目。Y zさんのお話を聞いた私達は“調べるだけでは理解することは無理なのだ”ということを実感することができました。戦争を体験したY zさんだからこそ、私達の胸に響いてきたのだと思っています。そして、あの時聞いたお話を、私達はこれからずっと子供や孫に伝えていきます。平和を守るのは、私達なのだということ。を改めて感じさせてもらうことができました。お体にお気をつけてください。ありがとうございました。

7月10日

3年C組 ○○○○

上記の例からわかるように、感想文は手紙の形式で構成されており、次のような内容を含んでいる。①時候の挨拶とお礼、②講話を聞く前の事前学習など、③Y zさんの経験について、④平和のたいせつさ、⑤後世への継承のたいせつさ、⑥結びの挨拶。すべての人がこの形式に則っているわけではない。ただ、①と⑥はだれもが書く手紙の形式上、必要な文言だと考えて分析対象から除外し、それ以外の書き手の個性が現れている部分、上記の感想文の例では②③④⑤に対応する部分に注目してみよう。

ひとまず、これらをコミュニケーションにおける基本的機能である「指示的機能」と「評価的機能」をもつ内容に分けると、②は事前学習などの平和学習をした経験であり明確に「指示的」であるが、③は「衝撃」あるいは「私たちの胸に響いてきた」などの言葉、文節から、「指示的」でもあり、「評価的」でもあると解することができる。④⑤については、価値判断にかかわっていることから「評価的」であるのはあきらかだ。

あらためて生徒たち全員の感想文の内容を概略整理しておくと、次のようになる。冒頭の時候の挨拶とお礼、末尾の挨拶を抜きにすると、言及されている内容は、主に以下の6項目である。それ

ぞれ、ほとんどの人がふれている場合は◎、半数程度がふれている場合は○、2、3割の人がふれている場合は△、2割以下の少数な場合は▽、と分類すると、176の感想文は、おおよそ以下のよう整理される。

- ・これまで沖縄戦について自分がした経験（事前学習、資料館めぐり）→ △
- ・Y zさんの話の感想、評価（衝撃、生々しい、臨場感、戦争の怖さ）→ ◎
- ・Y zさんの話の中の具体的な出来事への言及（死体、恐怖体験、鬼畜米英の教育、自決）→ △
- ・派生的な話・経験①（自分の祖父母の体験を聞いた）→ ▽
- ・派生的な話・意見や評価②（現在の国際情勢や憲法改正についての意見）→ ▽
- ・平和のたいせつさ → ◎
- ・後世への継承（語り継ぐ）のたいせつさ → ◎

上記の事例からもわかるように、Y zさんの講話に対し、話が「衝撃」的であるとか「戦争の怖さ」を知った等の表現でまとめている感想文がきわめて多いことがわかる。また、平和のたいせつさや戦争体験を後世へ継承する（語り継ぐ）意義をほとんどの感想文が言及していることが目をひく。その一方で、Y zさんの具体的な経験について言及している例はあまり多くなく、また事前学習の準備や資料収集をしたこと、講話を聞いて派生的に自分がこれまで経験したことに言及している例も少ない。このことは、出来事や事柄を示す「指示的」機能と価値判断や感情、思いなどを示す「評価的」機能という分類からすると、生徒の感想はあきらかに後者に偏っていることがわかる。

では、Y zさんの語りの内容とこれらの感想は十分対応しているのだろうか。Y zさんは平和のたいせつさや戦争体験の継承のたいせつさを語ろうとしたのだろうか。Y zさんの語りの内容に関

連する感想と対照しながら、さらに詳しく生徒の受け止め方について検討しておこう。

2) 生徒の感想と講話の内容

そもそもY zさんの講話は、どのように語られたのだろうか。残念ながら、その時のY zさんの講話の内容そのものはわからない。しかし、Y zさんが語り部活動をとおして、自分の少年時代、沖縄戦のときの逃避行の経験やそれをとおして何を伝えようとしたのかは、私のインタビューに応じて語ってくれた語りからおおよそ知ることができる。感想文のなかには語りの内容に断片的にはあるがふれているものがあり、それと対照することから、講話のおおよその内容が把握できるからである。

Y zさんの当時の体験については、別稿ですで紹介した（桜井 2009 参照）。1945年4月1日の米軍の沖縄上陸の時、Y zさんは12歳であった。戦闘が激しくなり、4月末に首里の自宅から母、祖母とともに南風原、東風平、具志頭経由で、摩文仁へ逃げている。東風平到着が4月28日、3週間ほど滞在し、その後具志頭で1週間、5月末頃に摩文仁に到着し、しばらくして保護されて収容所に移送された。自宅へ帰ることができたのは、それから1年後のことであった。

Y zさんの語りを、生徒の感想文と対照させながら見ていくと、いくつかの特徴を指摘することができる。

① 具体的・個性的な経験

第一の特徴としては、経験した出来事がたいへん具体的に語られていることである。その語りのリアリティについては、多くの感想文がさまざまな表現で取り上げている。

〔感想文2〕（抜粋）

修学旅行に行く前に私たちは沖縄について調べていましたが、Y zさんのお話は教科書に書いてないことばかりでした。本やインターネットで調べられない被害者の気持ちや

実際に一般人が体験した戦争の様子を深く知り、学ぶことができました。

〔感想文3〕（抜粋）

初めは正直「夜はちょっと眠たいなあ」とか思っていました……。でも、話を聞かせていただいているうちにその日の疲れと眠気は見事ふっとび、話にどんどんひきこまれていきました。住民を巻き込んだ銃撃戦、どんどん亡くなっていく人びと。命がけの食料ちょうたつ。死体をこわいとも思わなくなる日常。学校教育の実体。今私の中のY zさんの様々な体験がまるでビデオでも見ているかのように感じます。

Y zさんの講話が、いかにリアリティのある体験として衝撃的であったかは、〔感想文1〕からも明らかだが、さらに〔感想文2〕では本人だけしか語ることができない個性的な経験が語られていること、〔感想文3〕からは、ビデオを見ているような臨場感、リアリティのある語りになっていること、などが推測できる。Y zさんの語りは、ストーリーの展開が出来事の時系列的な連鎖で構成されている。とくに避難の経緯は、首里から摩文仁へ向かう途中の東風平到着が4月28日であったことを、後日公開された米軍将校の日記から確認している（桜井 2009 参照）。ラボフは、出来事を表すナラティブ文節の順序は、現実に来た出来事の順序と対応していると見なしたが、こうした時間の経過にそった出来事の語りは、起きた出来事にリアリティをあたえる、と考えることもできる。さらに、Y zさんの語りは、彼独自の経験であることを伝える巧みなストーリーの構成をとっていることである。それは、「防空壕で死体と一緒に暮らしていて」とか「死体の山だった」とか、日常ではあり得ない光景を「死体」というリアルな言葉でこともなげに表現したり、以下のような、自ら経験したことで発見した驚きをとまなう語り方である。

Y z：で、捕まった時の、そこの、今の健児の塔の入り口にこう待たされましたけどね。みんなこうして、殺されると思ってるから、こんなかつこうで、あの、座ってたんですけども。ま、水を飲まされ、水も自分たちが飲んで、はいて、ま、毒が入ってるかわかるから// * S：＝あ、毒じゃないって// うん。で、食べ物も、自分たちが食べてからくれるんでね。ああ大丈夫だと思って、もうボンボンボン食べて、やっと落ち着いたら死体が見えましたからね。（目の）前は全部死体だったんだ、ハッハッ。おそらくブルドーザーでこう（・）あの、えー、掃除したと思うんですね。で、反対側にはこう、死体と瓦礫がこう、いっぱい、積まれててね。ものが（お腹に）入って、初めてああ、やあ火炎放射器で焼かれて死体とわかったんだ。ああ。（・）人間、食べてないとね、何にも見えないんだ、フッフッフ。

〔感想文4〕（抜粋）

生々しい部分もありましたが、それが真実である為、しっかりと受けとめていきたいといっそう強く思いました。……死体と生活していると同じ状態での事など本当に信じられませんでした。

上記の〔感想文4〕のように、その体験を一言で表現している事例が多いなかで、以下の〔感想文5〕はY zさんの語りに具体的に言及しているめずらしい事例である。死体を「ボン菓子」と表現したおばあさんの巧みな喩えが印象深い表現として記憶されている。ただし、生徒は「パン菓子」と聞き間違ったようだ。

〔感想文5〕（抜粋）

私が一番心に残っている部分は「隣にいたおじいさんがいつもパン菓子を食べている」という部分でした。この部分を聞いた時に私は

「戦争の時に困らない様に、このおじいさんはパン菓子を多量に作っていたんだなあ。凄いなあ」と思いました。しかし、このおじいさんは用意周到だったのではなく、泡を吹いて亡くなっている、という部分で……

この件は、次のようなY zさんの語りがもとになっている。

Y z：私の、祖母がね、あの、壕に入ってから……71歳かな、明治生まれですけどね、だからあのもう弱って、老衰気味だったんですよ。で、どこにも出ないし、用足すくらいで、ちょっと出てって、用足して入ってくると。その奥でこうして3名が岩陰に入っていましたけどね。そんな生活しとったけど、私は、毎日毎朝毎晩、バラバラやられながら、芋掘ってきたり、サトウキビ持ってきたりして、3名がやっと一食、食べてたの。その、ばあちゃんはこの周囲はよく見とったんですよ。で、あの、事態になってからね、初めて、ああ君1人は疎開させるんだったと、後悔してましたよ。もう一命ないとわかったんでしょうね。あんなもう周囲、みんな死体ばかりになってるから。で、このばあちゃんがね、私に「あの、隣のおじちゃんおばちゃんがね、この前あいさつもしたけどもうあの、ボン菓子を食べてるよ」。ボン菓子ってご存知ですか？あの、お米をふくらした、// * S：ああはい知ってます//それ、売ってるよ、おいしいよね。それ食べてるっていうから。で、私、今頃、なんのことだろうと、思って、壕にはいってるの、出て、こうして見てみたんですよ。そしたらね、その表現どおりでね、人間、死んだ後、(…) こうして死んでも、こうなんですよね、膨れるから。で、上向きになるでしょ。で、真っ先に出るの、こっちのウジなんだ。口から。ムクムクムクと出てくるのこうして。ちょうどあ

の、(…) ボン菓子をこうして噛んでるこんな格好。(…) ばあちゃん、よく表現したなと思ってね。こんな惨めな格好です。私、気がつかなかったんですよ。私の目にはいるのは食べ物だけだからね。もう走って行ってこうもう帰ってさっと壕(に)はいるだけだから。

②「戦争が狂わせる」という価値観への到達

当時の皇民教育における「鬼畜米英観」の誤った教育にいかに関心が染まっていたかについて、Y zさんはくり返し語っている。米兵に助けられ食料を分け与えられて、そうした価値観は水解するのだが、だからといって米軍が正義であったという立場も取らない。米軍においても、のちに知った「ジャップ・ハンティング・ライセンス」という日本兵を動物に見立てた許可証の発行があったという事実から、日本だけが間違っていたわけではないことに気づく。Y zさんが扱って立っているのは、戦争が人を狂わせるという価値観である。

〔感想文6〕は、その教育のおそろしさを印象深く語っている。〔感想文7〕は、具体的に「許可証」にふれて、「人を獣としか思わなくなってしまう戦争」という見方から「戦争は両方の国を狂わせます」という結論に達している。Y zさんの思いがよく伝わった感想文である。

〔感想文6〕(抜粋)

この話を次の世代へも伝えていけるよう大切にしていきたいと思います。僕は特に死体の悪臭について頭に残っています。ウジがわき、何千何万の人が死んだのだから、自分では想像できないほどくさかったのだろなあと思いました。また、教育のおそろしさも強く感じる事ができました。天皇を神と教えていたために……鬼畜米英の教えがあったため、投こうも拒否し自決、自害が多くあった……このお話を聞いて、僕は何千何万ものなくなった尊い命を無駄にしないためにも、こ

れから生きていく僕たちは平和を守らなければと強く思いました。

〔感想文7〕（抜粋）

戦争当時の様子を話して下さり、戦争というもののおそろしさを考えさせられました。今まで戦争を少し軽く見ていたのかもしれませんが。予想以上の様子にとっても驚きました。私がY zさんのお話の中で一番心に残ったことは日本人を殺すための許可証があったということです。戦争は両方の国を狂わせます。そのためそんな許可証が生まれてしまったのだと思います。人を人と思っていたら、人は殺せない。人を獣としか思わなくなってしまう戦争をもう2度とくり返してはいけません。戦争は悲しみしか生みません。今なにげなく暮らしている日々が、平和がこんなにも大切な重要であることをY zさんのお話から学ぶことができました。これからも戦争のつらさを伝えていってください。また私達も未来のためにこの話を役立てていきたいと思います。

〔感想文8〕（抜粋）

私が一番心をうたれた話は、人が人の心を失ってしまうということです。学校などでの学習でも「戦争は人の心までもうばう」という言葉は何度も本で見たりした気がします。けれど今しか知らない私はその言葉の指す本当の意味を知りませんでした。そして、あの夜、Y zさんの話を聞いて、その言葉が本当になにを言いたかったのか、知ることができました。

こうした価値観の変転を、Y zさんは自らの経験をとおして語っている。彼がガイドを始めるようになって発見した彼独自の経験が、そこにあった。

Y z：これがあるのは私、60年近くになって始めてわかったんだ。ジャップ・ハンティング・ライセンスなんです。(…) だからね、われわれの鬼畜米英と、人間じゃないと教えるでしょ。彼らもそうだったんだよ。(…) われわれ人間じゃなかったんだよ。狩猟の対象だったんだ。……こんなのあったんだと、ハハハ。私は冗談だと思ったんだ、これ。あの、あんなに私たちに親切にしてくれて、ちゃんと水を飲ませて食料あげてね。ちゃんと人間として扱ってくれたんで。あれが、向こうが正しい教育してたんだ、と思ってたんだよ。日本の教育は間違ってる、向こうは正しい教育してると思った。でもこんなんだよ。戦争ってのは狂ってるよ。これ見てごらん。((資料取り出し)) 絶滅まで有効だよ。(…) あんた、ワシントン条約知ってるでしょ。ねえ。(…) ハハッ動植物絶滅させちゃいけないっていうことで出したの、アメリカなんだよ。そのアメリカが戦争中こうだったんだよ。

③生徒の独自の受け止め方

第三に、直接、Y zさんが語らなかったにもかかわらず、派生的、あるいは敏感に生徒が受け取った事柄が感想文には書かれている。Y zさんの語りによって触発された生徒自身のストーリーである。たとえば、この講話を聞いたり戦跡を見学したりするためにための事前学習をして得た知識、また講話に触発されて自分の経験を語ったり憲法九条の改正問題や昨今の近隣諸国との関係に関連するマスター・ナラティブに言及することである。

〔感想文9〕（抜粋）

Y zさんは必死で生きのびたということがわかりました。僕のおばあちゃんの姉の夫がビルマや中国のあたりで陸軍の中将をしていたらしいです。僕のおじいちゃんは、空軍の先生をしていた……今、北朝鮮が危ない……そして、北朝鮮も国際社会に復きし、真の世界

平和を目指していくために僕達は多くのことを学ばなければいけないと思った。

〔感想文10〕（抜粋）

このお話の中で私の印象に残ったことは「死体があまり怖くはなかった、それぐらい死が身近にたくさんあった」ということです。……最近では、憲法9条改正など、少しずつ戦争を起こそうとしている人が増えています……平和の大切さを実感しました。だから、私たちがこのような社会を変えていかなければいけないと思いました。

しかし、以上のような言及は、全体としては少なかった。驚いたことには、だれもが異口同音に継承の必要性を強調していたことである。本節冒頭の全文を引用した〔感想文1〕でも見られるように、戦争体験は語り継ぐべきであり、私たちがそうしていくべきだと書いていることである。中学生はまさしく語り継がれるべき対象ではあっても、まだ次の世代に語り継ぐべき主体にはなりえていないのではないのか。そう戸惑いを隠せないのは、この分析をしている私だけなのだろうか。たとえば、以下のような感想文がある。

〔感想文4〕（抜粋）

……やはり経験していなくても、とても恐ろしいです。この様な事が繰り返されないようにするのは自分たちなので、後世へ伝えていきたいです。

〔感想文11〕（抜粋）

今回、沖縄に来てY zさんのお話を聞いて教科書では学べないようなことを学びとることができました。……この世界が戦争の恐さを知らない人だけになったら少し不安になります。私たちは戦争の恐さを伝えていかなければなりません。

④沖縄の文脈

Y zさんには、平和ガイドとして戦争体験を語るようになって発見した「沖縄の文脈」がある。感想文ではだれひとりそれに言及しなかったことから、講話ではふれることはなかったであろう（校正中に、本人に確認したところ、語っていないとのことであった）。しかし、Y zさんにとって、もっとも語り伝えたいことのひとつではないか、と私は考えているので、付言しておこう。前節であげた戦後生まれのAmさんとは異なるY zさん独自の「沖縄の文脈」が存在するのである。それは戦争体験を語るためにふりかえったとき、「鬼畜米英」という日本の教育を受けた母やY zさんとは異なって、祖母が戦争経験をもたない「琉球人」としての価値観に立っていたことを発見したことである。これは、戦後世代が沖縄を日本本土の「捨て石」「犠牲」になっているという考え方に対して、平和な琉球時代という別の「沖縄の文脈」を提起するものである。

Y z：私の祖母っていうのは明治時代の生まれなんです。それで当時の女性っていうのは（・）あの、教育受けてない。日本教育まだ受けてない。（・）うん、沖縄でも、女性が勉強必要ないっていわれて、やらなかったそうでっへっへ。えー義務教育制度がしかれとってもやっぱり受けてないから、洗脳されてないんですよ。われわれは、私の母は、当時37歳で女学校出ましたからね、完全に洗脳されてるから、あの皇民教育をたっぷり受けてるんで、神の国ってのを信じてる、鬼畜米英もよく知ってる。ところが祖母は知らなかったですね、まったく。ラジオもないでしょ、テレビもないでしょ、新聞読めないでしょ、日本軍の話聞けないでしょ。そのまま琉球人だったわけだね、ていうのはね（・）あの摩文仁行ってから、あの、もう米軍は余裕があるんで、朝1時間とか夕方1時間、撃たなかったんです。て、ゆうのは、朝食時間

とか夕食時間だったんですね。もう余裕があるから、ゆっくり、食べて、コーヒーも飲んで、さあまた人殺しだって言ってやったんでしょね。その時間って私たち、あの、食糧探しだったんですよ。であの摩文仁、今度行ったとき見てごらん、この、この海はね、(…) リーフがないんだよ。// * S : リーフがない// うん。沖縄の海ってのはみんな沖にリーフが、白い波が立ってるでしょ。あそこないんだよ、明日見てごらんね。ここまであの、駆逐艦入ってきましてバラバラ撃ってましたからね。芋ほりも、もう容赦なくバンバン撃ってたんだ。(…) であの一、まああそこに来た時はもう芋もそんなにないし、サトウキビはいっぱいありましたけどもね、それ食べてたんですよ。で、それも米軍は焼いてしまった。(…) で、私、一度 (..) 真っ黒に焼かれたサトウキビを担いで壕に行きましたらね、うちの祖母が、これどうしたんだこの真っ黒いサトウキビは、って言うんで、いや、アメリカ人がこれ焼いてしま、焼いてんだよ、と言いましたらビックリしましてね、(.) こいつらは人間じゃないかと、人間じゃないのはわかってるんだよね、ハハ。(笑) 人間じゃないって言われてるんだから、へーと思って。はじめてわかりましたよ。だから、ゆっくりあとで、大人になってから、はあーあのときの年寄りと言うのは、日本人じゃなかったんだなってね。(..) 沖縄の方言にですね、あの、「やーさしようしねえむんくいり、ふいいさしようしねえちんくいれ」(飢えている人には食べ物をあたえ、寒さには着るものを与えてやるのが一番の思いやり)、これ方言ですけどね、飢えてるのには飯をあげなさいと。で、凍えてるのには着物を着せなさいという、敵も味方もないわけだ。当時もう、武器も捨てて、平和な世の中で、あの、遭難した人をみんな、助けて、送り返しているからね。そおゆう時代の感覚が抜けな

かったんだよ。だから、祖母が言うのはですね、この連中は、その自分たちが、これを食べ生きてるってことを知ってるはずだと。それを焼くってことは人間のやることじゃないってわけだ。ハッハッハッハハハ、私も母も、ばあちゃんは何を考えてるんだろうと思って、初めて、あの、わかって、まあ大人になってから、ああ、あのときの、年寄りっていうのは日本人じゃなかったんだと、初めてわかったんだ。

* S : ある意味で、教育でこうね？ 鬼畜米英 =

Y z : =だから洗脳よ、洗脳されてなかったんですよ// * S : ああなるほどね// それを私は気がつかなかったけど。で、私と一緒に逃げた、あの、私の、祖母の、兄さんも一緒だったんです。おじさんたちも。この人は戦争が始まったの知らなかったんですよ。攻めてくるまで。

戦前の教育によって皇民化が進められたことを、Y z さんは「洗脳」という巧みな言葉で表現した。祖母をはじめ同世代の高齢者は、日本語が読めなかったこともあって皇民化教育の影響を受けなかったゆえに日本人化されずに「琉球人」として生き、人間への信頼を失うことはなかった。Y z さんの「沖縄の文脈」は、「琉球文化」の伝統から引き出されたものなのである。

5. 事実と評価（まとめにかえて）

関沢まゆみ (2010) によると、私の戦跡ガイドの解説の特徴は、自分の意見は言わないことである。フランス、オラドゥール・スール・グラスの町はナチス親衛隊SSによって市民 642 人が虐殺された町である。その遺跡ガイドは、「ただ起こったことだけを話すことに徹底している」という。メッセージは遺跡を見て見学者それぞれが読みとる。あいまいなことや脚色を排除するのは、

死者の尊厳を傷つけないようにするためである。それに対して、日本では、自分の経験や気持ちは「体験した人じゃないとわからない」という感覚が強い、と指摘する。それは「意識の閉鎖性」や「記憶の個人化」とでもいえるもので、ヒロシマの語り部の例をあげて、体験に加えて戦争の悲惨さや平和の強調などのメッセージ性が強い傾向があり、感情的な共感を重視している。彼女は、この差違を「文化的文脈の違い」に求めている。

Y zさんの語りは、出来事の連鎖からなる「経験的語り」によって構成されている。これは時系列的つながりを構成するもので、ラボフのいう「ナラティブ文節」＝リアリティに対応するものだ。メッセージ性の強い感情や価値観をふくめた「評価」も、自らの経験から出てきたものであることは、彼の語り方から了解できるであろう。ところが、講話を聞いた生徒の感想文は、きわめて画一的である。Y zさんの個人的な経験よりも、感情的、評価的なメッセージとしてのみ受けとめる傾向が強い。それを関沢の指摘するような、文化的な特質と関連させることができるかどうかは、さらに検討する必要がある。しかしながら、Y zさんの経験をもっと多様に受けとめることが可能でないか、とは思う。それは彼の語りが自らの経験をもとに構成されていて、具体的に起きた事柄が了解できるからである。ところが、感想文にはY zさんの語った具体的出来事への言及は少なく、だれもが戦争体験を語り継ぐ重要性だけを一様に強調している。これは教師による教育的な効果ではないかと思われるが、これも推測の域をでない。Y zさんの語りが語り継ぐべき意義があるという意見は理解できるが、自ら語り継ぐとなると、その根拠となるのは、Y zさんの語りの指示的な内容、すなわち「経験的語り」の内容ということになるのではないだろうか。評価や価値観などの「評価」的メッセージを受けとめるだけでは、自らの衝撃的経験として語り継ぐには弱い。

なお、聞き手がどのように受け取っているのかを明らかにするのに、講話を聞いた中学生の感想

文の分析がはたしてデータとして適切だったかどうかは即断できない。どのような指示で書かれたか、中学3年生という年齢層が妥当か、字数がもっと多ければさらに具体的な言及があったかもしれない、等々、いくつもの限界があることを断っておく。

〔文献〕

- 桜井厚, 2009「〈体験〉と〈経験〉の語り」『日本オーラル・ヒストリー研究』第5号
 桜井厚, 2012『ライフストーリー論』（現代社会学ライブラリー7）弘文堂
 関沢まゆみ, 2010『『戦争と死』の記憶と語り』（関沢まゆみ編『戦争記憶論』昭和堂）
 吉浜忍・大城和喜・池田榮史・上地克哉・古賀徳子, 2010『沖縄陸軍病院南風原壕』高文研